氏　　名	菅原　大地
学 位 の 種 類	博士（心理学）
学 位 記 番 号	博甲第　９１１７　号
学位授与年月	平成　３１年　３月　２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学位論文題目	ポジティブ感情の概念構造と機能差 ―拡張‐形成理論の実証と精緻化―

主　　査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮　容子
副　　査	筑波大学教授	教育学修士	杉江　征
副　　査	筑波大学助教	博士（心理学）	大谷　保和
副　　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川　進太郎

論文の内容の要旨

菅原大地氏の博士学位論文は、ポジティブ感情の機能差に着目し、日本人におけるポジティブ感情の概念的検討を行った上で、ポジティブ感情が人々の思考や行動、人生満足度に与える影響について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第 1 章において、著者はポジティブ感情に関する基礎的研究を概観し、ポジティブ感情研究においては主要な理論とされる拡張-形成理論（broaden-and-build theory）をもとに理論的な検討を行っている。その結果、これまでの研究ではポジティブ感情の定義が定まっていないことから、著者は本論文でポジティブ感情を「快の主観的体験を伴った、状況の認識から反応までの体験過程」と定義し、従来のポジティブ感情研究の問題点として以下の点を明らかにしている。（１）欧米圏を中心に研究が実施されているために、日本人にとって重要かつ機能的なポジティブ感情が見過ごされている可能性がある、（２）ポジティブ感情を細分化して認知機能に与える影響を明らかにした研究が乏しい、（３）ポジティブ感情の生起が人々の思考や行動を変容させ、変化と成長をもたらすプロセスの検証が不十分である。

第 2 章では、第 1 章での理論的な検討を踏まえ、本研究の目的を、（１）日本人にとってのポジティブ感情が何であるかを検討し，その概念構造を明らかにすること、（２）ポジティブ感情を細分化し、認知機能に与える影響を検討すること、（３）縦断的調査によって、ポジティブ感情の生起が人々の変化と成長をもたらすプロセスを検討することとし、その意義についても明確に論じている。

第 3 章から第 6 章では、ポジティブ感情に関する実証的な検討を行っている。第 3 章では、まず、研究 1 として日本人大学生と大学院生を対象に、ポジティブ感情としてみなされるうる感情語（218 語）を呈示し、ポジティブ感情らしさを評定させている。その結果、研究で使用した多くの感情がポジティブ感情としてみなされることを明らかにするとともに、従来の研究でポジティブ感情として扱われてきた感情の中にはポジティブな評定値が低いものが存在することを示している。続く、研究 2 では研究 1 を参照してポジティブ感情語 132 語を選定し、調査協力者にカテゴリー分類させることで、ポジティブ

感情の概念構造を検討している。その結果、ポジティブ感情は自己志向的な感情と、他者志向的な感情とに大別されることを明らかにしている。

第 4 章では、ポジティブ感情特性を細分化して測定することが可能な尺度（Dispositional Positive Emotion Scales）を邦訳して、その妥当性と信頼性を 3 つの調査研究により検討している。研究 3-1 では、因子的妥当性、内的整合性、研究 3-2 では再検査信頼性、研究 3-3 では基準関連妥当性があることを示している。これらの一連の研究により邦訳した尺度が概ね十分な妥当性と信頼性を有していることを明らかにしている。

第 5 章では、細分化したポジティブ感情特性と認知機能との関連を検討している。研究 4 では、細分化したポジティブ感情特性と創造性の関連を検討し、喜び、畏敬、誇り、愉快、強迫的情熱が創造性と正の関連を示すこと、満足や愛情は負の関連を示すことを明らかにしている。研究 5 では細分化したポジティブ感情特性と認知の柔軟性と、思考と視野の拡張との関連について検討している。その結果、尊敬と畏敬は思考と行動の拡張と正の関連すること、和みは負の関連をすること、愉快は従来の研究と異なり、認知の柔軟性と負の関連がみられることを明らかにしている。

第 6 章では、3 時点の縦断調査によりポジティブ感情の生起が、認知の柔軟性と肯定的自動思考を媒介して、人生満足感を高めるというプロセスを交差遅延モデルによって検討している。その結果、ポジティブ感情の生起が肯定的自動思考を媒介して人生満足感を高めることを明らかにしている。

第 7 章では、理論的検討と実証的検討を踏まえ、総合的な考察をおこなっている。ポジティブ感情には、文化普遍的な感情と文化特有な感情が存在し、文化普遍的な感情は生物としての適応に大きく関わっていること、文化特有な感情はその文化圏における well-being に寄与する可能性が高いことを論じている。また、本研究で検証されたポジティブ感情の機能差について、それぞれの機能が今後どのように応用可能であるかを述べている。著者は、本研究のまとめとして、先行研究と本研究で得られた知見を統合し、拡張-形成理論を改良した新たな理論を提唱している。最後に、本研究の限界に加え，臨床的な示唆と今後の展望について言及している。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文は、ポジティブ感情の機能差に着目し、日本人におけるポジティブ感情の概念構造から、その機能と長期的な効果を検証したものである。日本人におけるポジティブ感情の概念構造の検討は、今後本邦におけるポジティブ感情研究の基盤となるものである。ポジティブ感情を細分化して、その機能差に検証する試みは独創性が高いと判断している。著者が提唱した理論は、従来の理論と比べ文化差を考慮しており、ポジティブ感情の機能差がもたらす長期的な影響の差異も説明できるなど優れた点が多い。ポジティブ感情に関する重要な基礎的な知見を明らかにしたものであり、今後研究の発展が期待される。

平成 31 年 1 月 9 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。